

弘前学院の創立期と宣教師たち

石 垣 雅 子
Masako Ishigaki

はじめに

弘前学院は1886年（明治19年）に創立されたキリスト教主義学校である。その母体は、1875年創立の弘前公会、1877年改称の弘前美以美教会（現、日本基督教団弘前教会。以下、弘前教会と略する）である。弘前教会の記録には《弘前教会会堂内に女学校を設置。後の弘前学院であるが、当時は資金提供者のライト夫人にちなんで来徳女学校と呼ばれたと言う。取扱責任者（事実上の校長）は山鹿元次郎。》¹とある。教会の中につくられた小さな女学校が以来130年以上の歴史を刻んできたこととなる。

ここ弘前は、明治時代初期よりキリスト教の影響を大きく受けた町であると言える。東奥義塾が1872年に創立され、創立以来キリスト教宣教師たちが外国人教師として招聘された。東奥義塾は津軽藩の藩校の流れを汲み、それ故に旧津軽藩士の子弟が集まり、これらの人々に対しての洋学中心の教育が行われた。東奥義塾が多方面の分野で活躍する人材を輩出していったことはよく知られている。²

明治初期までほとんど外国人との接触がなかったであろう弘前に、明治初期、東奥義塾と弘前学院という二つのキリスト教主義学校がうみ出された。弘前という町が、キリスト教という宗教とその価値観をあまり拒否することなく受け入れていった。一体キリスト教をもたらした宣教師たちはどのような働きをなしていったのか。本稿は、主に弘前学院に焦点を当てつつ、その創立、また弘前と宣教師たちの関わりを考察しようとするものである。宣教師たちが日々を過ごした弘前学院外人宣教師館についてもその歴史を顧みてみたい。

弘前教会の創立期と本多庸一、ジョン・イング

メソジストとは、そもそもは18世紀後半ジョン・ウエスレーによりイギリスで開かれたキリスト教プロテスタントの中の一教派である。厳格な戒律と敬虔な信仰生活の実践を重視したことで知られる。この教派は、やがてイギリスからアメリカに渡った。そして19世紀半ばにはアメリカ最大のプロテスタント教派となった。メソジストは南北戦争後に二つに分裂し、アメリカ・メソジスト監督教会とアメリカ・南部メソジスト監督教会に分裂した。

弘前に宣教を行ったのは、主にアメリカ・メソジスト監督教会の宣教師たちである。代表的なのは、弘前教会を創立した創立メンバーの一人ジョン・イングであり、彼はこの派に属する宣教師であった。また、本多庸一は二度目の横浜留学中にジェームズ・バラから受洗しているが、バラはアメリカの改革派教会の宣教師であった。明治初期の横浜では長老派教会や改革派教会の宣教師たちが集まっていたことが知られている。宣教師たちは、英語や洋学を教えながら、機会をとらえてキリスト教や聖書を人々に伝えようとしていた。これらの宣教師たちから洗礼を受けた日本人キリスト者たちが横浜日本基督公

¹ 『弘前教会百年史表』3 - 10 頁

² 北原かな子『津軽の近代化と外国人教師』14 頁

例えば、珍田捨己（1857 - 1929 外交官）、陸羯南（1857 - 1907 政治評論家）などが初期の東奥義塾で教育を受けたことは知られている。

会をつくり出した。いわゆる横浜バンドの成立である。³ 本多は1872年、23歳で洗礼を受け、この日本基督公会に参加するようになった。日本基督公会は、その特徴として神学論や教会政治論を避け、独立自治の超教派主義を標榜した。⁴ 宣教師の出身教派にあまり影響を受けないゆるやかな教会形成を目指していたのであろう。そしてそれ故、本多も横浜時代には教会の教派を意識することはあまりなかったのであろう。しかし、弘前公会の時代を経て、彼は教派としてのメソジストを意識し、またイングとの親密な協力関係をもってメソジスト監督教会との距離を詰めていったであろうことが想定される。

一方、ジョン・イングはアメリカ人であり1874年に来日している。中国での宣教師活動から帰国する途中日本に立ち寄り、弘前で東奥義塾の教師になる招きを受け応じたとされている。⁵ 弘前には本多庸一と共に12月に着いたとの記録がある。翌年の1875年6月に彼は本多と協力し14名の東奥義塾の学生に洗礼を受け、これらのキリスト者となった者たちが中心に弘前公会が設立された。このときイングが協力宣教師であったと記載されている。⁶ なお、1878年にイングは離日、1886年に本多は仙台メソジスト教会に移ることとなる。

弘前公会の時代は短く、1年数ヶ月であった。1877年に弘前公会は弘前美以美教会となった。それまでとは教会の組織・制度が大きく変わった。教会員はそれを自覚的に受けとめ、自らの教会がメソジストの教会であるという意識が芽生えたのではないかと1968年から1981年まで弘前教会を牧した大木英二は指摘している。教会員たちは美以美教会がどのような教会であるかを検討した上で、教会員の決議をもってイングの所属するこの教会組織に加入することを決めたのだった。メソジストの一つの大きな特徴である「監督の指導のもとに運営される」教会となったことで、新たな展開をはじめたとも大木は指摘している。

このとき基督公会からの離脱に異議を出した教会員も数名いた。が、大多数の教会員は賛同。この決議に従い、本多は横浜の基督公会を離脱する手続きをとり、また彼はイングを介してメソジスト監督教会日本宣教会（1886年にイングはこの会の宣教師として認められていた）の加入手続きをとった。蛇足ながら、美以美教会とは日本におけるアメリカ・メソジスト監督教会のことであり、中国での呼称を踏襲したものである。⁷

弘前学院の創立

弘前学院の創立1886年から遡ること6年前、北海道函館にアメリカの篤志家カロライン・ライトの寄付をもって開設された女学校がある。来徳女学校、のちの遺愛女学校である。函館は1859年には横浜、長崎とともに貿易を開始した港町であり、港を通して様々な国の文化が持ち込まれた。各国の居留地もあり、江戸時代の鎖国が終わり欧米に開国したばかりの明治初期としては大変珍しい外国人が住んでい

³ 氣賀健正『本多庸一 信仰と生涯』36頁、194 - 195頁

アメリカ・メソジスト監督教会とアメリカ・南部メソジスト監督教会にカナダ・メソジスト教会を加えたものがメソジスト三派であり、それぞれが独自の海外伝道を展開していった。また、メソジスト監督派教会という言い方もあるが、本稿ではメソジスト監督教会と称することにする。

⁴ 同書 42頁

横浜の日本基督公会は1872年創立。現在の日本キリスト教会横浜海岸教会である。

⁵ O・ケーリ 江尻弘訳『日本プロテスタント宣教史』159頁

⁶ 『弘前教会百年史表』2 - 3頁

⁷ 大木英二『弘前教会百年小史』23頁、及び『120年の歩み 日本基督教団弘前教会』11 - 12頁
1887年からは弘前美以美教会の最後の「美」を取り、弘前美以教会と呼ぶようになった。

る町であった。⁸ 当然のこととして、各国外国人の信仰するキリスト教の教会も建てられていた。⁹

弘前においては、すでに東奥義塾は開校していた。が、弘前教会の人々はここ弘前にも遺愛女学校のような女子のために学校がつくれないものかという願いを持つようになった。本多庸一はこの弘前教会の要請に応え、当時遺愛女学校の校長であったメアリー・ハンプトンと協議、遺愛女学校の分校として開設する運びとなった。1886年のこととされている。当初は来徳女学校と称したが、1889年には弘前女学校という名称となっている。¹⁰ この学校は、創設当初は弘前教会の教会堂内につくられた。礼拝を行う日曜日以外は空いている教会堂を利用しようとしたのである。教師2名と生徒16名のスタートであったという。¹¹

創立時の取扱責任者（事実上の校長）の山鹿元次郎についてである。彼は東奥義塾の出身であり、弘前公会設立の日にイングから洗礼を受けている。この頃は青森で実業（「青森新報」の社主兼印刷人）に従事していたが、本多から特に請われて女学校の運営に携わるようになった。しかしながら、その従事期間は決して長いものではなかった。本多が弘前を離れ仙台に赴任した数ヶ月後、彼もまた本多を追って弘前を離れた。¹² 山鹿は、弘前を離れた後、仙台、青山、米沢の教会で長老として伝道牧会の従事した。が、その後、1893年彼は弘前教会の長老として故郷の弘前に戻ってきた。当時のメソジスト教会においては、長老とは信徒職ではなく牧師職であった。以来、合計33年の長きにわたり、弘前教会の伝道牧会に関わり、牧師職引退後も弘前学院と東奥義塾の良き理解者、協力者として尽くした。¹³

本多と山鹿が相次いで弘前を離れた後、弘前学院の発展に尽くしたのが長谷川誠三である。自分の私財を提供すると共に募金活動を行い、生徒の数が増え手狭になった弘前教会から新しい校舎を建てることに尽力した。彼は、弘前の隣町である藤崎の実業家であったが、経営手腕もあり裕福であった。また、教育にも関心が高かった。洗礼を受けたキリスト者でもあり、キリスト教による女子教育を自分の娘たちに受けさせたいという個人的な願望もあったという。1889年5月に私立弘前女学校設立認可を得、約1ヶ月後の6月25日に開校式を行っている。¹⁴

長谷川はこの校舎新築移転及び私立弘前女学校の運営のためにアメリカのメソジスト監督教会女性外国伝道協会（The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church）との関係を築き上げている。函館の遺愛女学校も、同協会から派遣された宣教師を校長としていた。校地と校舎を用意するのであれば、自国アメリカから女性宣教師（婦人宣教師という言い方もある）を派遣しその学校の校長とし、その給与保障をする意向が伝えられた。長谷川はその申し出を受け入れた。¹⁵

⁸ 『弘前学院百年史』15頁

⁹ カトリック元町教会：カトリック、1859年創立。函館ハリストス正教会：ロシア正教、1860年創立。函館聖ヨハネ教会：英国国教会（聖公会）、1874年創立。日本基督教団函館教会：アメリカ・メソジスト監督教会、1874年創立。

¹⁰ 大木 前掲書31頁

1886年の来徳女学校開校日に関しては、5月25日という記載あり（弘前教会関係の資料による）。私立弘前女学校の開校式が1889年の6月25日に行われたため、現在に続く弘前学院の創立記念日は6月25日になった。

¹¹ 『120年の歩み』18頁

¹² 『弘前学院百年史』17－18頁

¹³ 『120年の歩み』23頁

¹⁴ 『弘前学院百年史』24－25頁、及び43頁

¹⁵ 同書26頁

『弘前学院百年史』では、協力援助したこの団体を「WFMS」と称している。しかし、メソジスト監督教会の女性外国伝道協会だとすれば「Woman's Foreign Missionary Society」の後に「of the Methodist Episcopal Church」とついていたのではないと思われる。他の資料、岡部一興著『長谷川誠三 津軽の先駆者の信仰と事績』100頁にも「WFMS」をメソジスト監督派教会女性海外伝道協会としている。確認が必要なのだが、元々の資料を見つけれなかった。

メソジスト監督教会女性伝道協会の働き

前述したように、弘前女学校はアメリカのメソジスト監督教会の支援を受けて開校することができた。それでは、メソジスト監督教会女性外国伝道協会とはどのような団体であったのだろうか。ここで注目すべきは、女性の宣教師たちが外国に伝道に行くということである。また、それを支えたのも女性たちであったということである。

19世紀アメリカのプロテスタント教会、とりわけ教会の女性たちは、海外伝道に深い関心を示した。そして、海外伝道に多くの宣教師を送り出した。そもそも何故、女性の宣教使たちが数多く派遣されたのかといえば、基本的に夫婦を一組として任地に送っていたからである。彼女たちの役目は主婦として夫を支え、余力があれば現地語を学び、夫の伝道を助けるなどした。¹⁶

しかしながら、弘前女学校、あるいは遺愛女学校に送られた宣教師たちの多くは、独身の女性たちであった。彼女たちは単身で来日しているのである。これには、メソジスト監督教会女性海外伝道協会の存在がある。この団体は1869年3月ボストンで結成され、同年より女性宣教師をよりインド、中国、日本、南米、メキシコ、アフリカ、ブルガリア、朝鮮、イタリアへと派遣した。日本には最初的女性宣教師ドーラ・スクーンメーカーが1874年に赴任している。¹⁷

当時の日本側の事情としては、一番に男性が不用意に女性に近づくことが難しかったことがあげられる。しかも、「異国から来た人」すなわち外国人であって男性、そして「異国の宗教であるキリスト教」を宣べ伝える役目を果たそうとする宣教師にとって、日本人女性への接近は大変困難であったことが想定される。その部分を少しでも緩和し、女性に近づき得る存在として、同性である女性の宣教師たちの派遣がなされるようになったのであろう。しかも、最初は男性宣教師と宣教師の妻の夫婦で送り出されていたのだが、やがて単身で独身の女性たちが来日するようになったのである。¹⁸ 彼女たちは、アメリカから太平洋を隔てた日本という国にやって来た。そして、外国人が珍しかったであろう地方へも赴任していった。メソジスト監督教会の女性宣教師たちは前述の弘前、函館はもとより、長崎の活水女学校（1879年創立、現在の活水学院）、福岡の福岡英和女学校（1885年創立、現在の福岡女学院）をもつくり出している。¹⁹ これらの学校の創立と共に、女性宣教師たちの来日と日本での仕事ははじめられているのである。

女子の教育を担う女学校をつくり、そこに女性の宣教師たちを送り、教師として日本の女子を教え導く。「異教徒の地、未開の地へ行く」というハードルを飛び越え、「キリスト教を伝える」という使命に燃え、「女子のための学校教育を行う」という役目を果たすのは、決してたやすいものではない。しかし、弘前のみならず日本の各地でそれが可能となり、実際になし遂げられていった。何故なのか。決して崇高な使命感や敬虔な信仰心だけでなし得るようなものではないと考える。むしろ、女性宣教師たちの多くは、その困難な役目に充分応え得る個々の能力を有しているからこそ可能となったと考えられるのである。

19世紀のアメリカにおいて、教師が中産階級の独身女性にとって典型的な職業だった。そして、宣教師として来日した女性の多くが、教師資格を持つ者が多かったのである。それ故、女性宣教師たちは、自分の教師としての経験を生かせる女子教育に積極的に取り組んだ。女子を教育することを通してのキリスト教伝道を行おうとしていったのである。しかし、これはキリスト教や聖書、その価値観の一方面的な押しつけではなかったし、ましてや自分たちの言葉を教え西欧化を図り「進んだ」文明や文化を誇示

¹⁶ 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』18 - 19 頁

¹⁷ 齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記』29 頁、及び 45 - 46 頁

¹⁸ 同書 47 - 48 頁

¹⁹ 小檜山 前掲書 185 頁

するための教育ではなかった。その土地の文化が尊重されつつ女子教育が行われていったのである。²⁰

弘前女学校においても、初期の頃より確かに英語教育は重視されていた。1889年の弘前女学校高等小学校課程表によれば、週に5時間の英語の授業を課していたことがわかる。しかし、と同時に、手芸や裁縫教育、また毛糸による編み物の授業もあった。このように女子の実際の生活に身近な科目にも授業時間をさいており、さらに冬はとても寒いこの土地の事情にも合わせた被服教育が行われていたと推察される。²¹ また、キリスト教教育についてであるが、毎日礼拝が行われていた。1886年から1889年、及び1890年から1891年に校長であったメアリー・ハンプトンの手記によれば、毎朝各組ごと（五つの教室があった）に行うお祈りと聖書のお話の時間が礼拝であった。これとは別に、彼女は校長宅に個別に生徒を呼び、英語の聖書や讃美歌を教えたとのことである。「修身」や「倫理」の授業においても、「唱歌」においても、聖書やキリスト教、讃美歌などが教えられていたのであろうと考えられる。²²

メソジスト監督教会女性伝道協会は、このように弘前女学校をはじめとする女子教育を行うべく女性宣教師を日本へ送り出した。そして、アメリカにいるこの会の会員たちはそのための資金を生み出し、宣教師たちを支えた。その助けとなったのが、機関誌『Heathen Woman's Friend』である。協会発足の3ヶ月後、1869年6月に機関誌第1号が発刊された。当初定価は誰もが購入できるように年間30セントであったという。1896年には誌名を『Woman's Missionary Friend』に変更した後、1940年まで70年以上にわたって発行され続けた。協会の設立に当たり、資金源として教会からの財政援助を乞わない約束であり、また女性のみの組織であるがために大口の献金が望めない状況であった。

故に、この機関誌とその売り上げは大きな役割を果たしていた。女性だけでなく子どもを読者として取り込むために、女性宣教師から送られてきたその土地の童話や子どもの話なども掲載されたという。機関誌を通して、知らない国の情報がアメリカにもたらされる。アメリカの女性たちはそれを読むことでその国や土地の知識を得ることができた。²³ さらに言うなら、自らは現地へ実際に行くことが生涯ないにしても、自分もまたメソジスト監督教会女性伝道協会が行っている海外伝道へ参加しているのだという意識を高める効果はあっただろうことがわかる。

ジョージアナ・ボーカス

それでは、実際に来日し女性宣教師として働いた人たちはどのような人であったのか。一人の例としてジョージアナ・ボーカス（1862 - 1926）をあげる。ボーカスは、アメリカ・メソジスト監督教会女性伝道協会の派遣により1890年に来日した女性宣教師である。来日前は小学校の教師であり、函館遺愛女学校、弘前女学校、米沢英和学校（1895年に廃校）で教鞭をとった。一度日本を離れるが再来日し、1897年からは横浜で常磐社なる出版社をつくり、雑誌『常磐』や邦文の書籍を発行したことで知られている。²⁴ 弘前女学校においては第5代校長であり、その在任期間は1891年から1895年である。

²⁰ 横浜プロテスタント史研究会『横浜の女性宣教師たち 開港から戦後復興の足跡』21頁

「言葉」を例にとると、宣教師は着任後しばらくの期間は現地語の習得に専念することが義務づけられていた。

²¹ 『弘前学院百年史』35 - 40頁

²² 同書48 - 49頁

²³ 齋藤 前掲書47 - 49頁

なお、齋藤氏の論文「メソジスト監督教会海外伝道運動と来日宣教師夫人の貢献」によれば、機関誌『Heathen Woman's Friend』においては宣教師の妻たちがアメリカの会員に向けて日本を紹介する役割を引き受けていたこと、また彼女たちの書いた日本紹介記事が多数記載されていたことが指摘されている。

²⁴ 同書151 - 152頁

ボーカスの生没年は『横浜の女性宣教師たち』による。来日女性の宣教師リスト xvi 参照。

ボーカスの性格について《生来気丈な人らしく、時には間にたつヘルパーを通して弘前教会の会員たちとの間に相当にはげしい感情的な衝突があり、その調停のために東京から有力者の来弘の話もあったが、あやういところで誤解がとけて大事には至らなかったことも伝えられている。》と『弘前学院百年史』は書いている。²⁵ しかしながら、まわりに外国人のほとんどいない土地において、女学校の校長としての責任を果たしつつ、教会の人々とも上手に関係を築いていくということは相当な重圧であり苦勞をしたことは想像に難くない。衝突があったことを本人の性格によるとするのは簡単だが、そのみを理由とすることはできないと考える。そして、もしたとえ衝突があったとしても、それに増して彼女の弘前で働きは大きなものだったと言うことができる。

ボーカスは弘前の町を愛し、住まいの二階から見える岩木山にしばしば勇気と安らぎとを与えられたと記している。²⁶ また、特筆すべきは「あだこ学校」の開設であろう。「あだこ」とは津軽弁で子守をする人の意味である。商家に雇われ、その家の子を子守する子どもたちのための学校である。学校に通う年齢となりながらも学校に通うことがかなわない子守の子どもたちを集めての学校である。ボーカスの教え子である弘前女学校の卒業生の一人、中村のぶを教師としてはじめられたという。授業料は取らなかったし、必要な教材や文具も与えたらしい。必要経費や教師の給金はボーカスの伝道資金から支出されていた。²⁷ ボーカスは、日本の一地方である弘前にあって、自らの宣教師としての使命を果たし、また教育者として女学校のみならず「あだこ学校」のような身銭を切る慈善事業と思える教育をも行っていったのである。

ボーカスは1895年の春に弘前女学校の校長の職務を後任宣教師に譲り弘前を離れている。前述したように、一度アメリカに帰国した後、再来日し横浜に常磐社を創設し文書伝道に専念することとなった。自給宣教師となったのである。加えて、学校教師という教育者ではなくなったボーカスだが、日本の情勢や報告を『Woman's Missionary Friend』誌に書き送り、積極的に日本を発信していった。

さらに、邦文の出版物も発刊している。『常磐 西洋料理 (Tokiwa Cook Book)』という本は明治37年(1906年)初版が出されているが、手元にあるものは大正14年(1925年)訂正五版とある。何度か出版が重ねられたことがわかる。²⁸ また、月刊誌『常磐』は平仮名しか読めない女性でも楽しめる雑誌として、全紙面全ての漢字にルビをふっていたという。『常磐』が目指したのは、キリスト教信仰に基づく生活の提示ではあったが、西欧的価値観の押しつけではなかった。そのため25年にもわたり刊行を続けることができた。

彼女の日本在留期間は大変長く30年以上であった。しかし、1923年9月に関東大震災が発生する。この地震のため横浜の常磐社は壊滅的な打撃を受け閉鎖を余儀なくされた。このためボーカスは離日せざるを得なくなり、アメリカへと帰国することとなった。帰国後、1926年に63歳で没したという。²⁹

弘前学院外人宣教師館とメリー・グリフィス

ボーカスが弘前で居住した住居は、弘前市塩分町にある校長住宅であった。1889年に長谷川誠三が弘前女学校の女性宣教師たちのために購入したものである。ボーカスの後任の宣教師たちもこの住宅に住んだ。しかし、この住宅は手狭でもあり、新しい住居を求める必要性が生じていた。また、小さな日

²⁵ 『弘前学院百年史』61頁

²⁶ 齋藤 前掲書 161頁

²⁷ 相澤文蔵『津軽を拓いた人々』200 - 201頁、及び『弘前学院百年史』63 - 65頁

²⁸ ボーカス『常磐 西洋料理 (Tokiwa Cook Book)』

当時は大変珍しかったであろう西洋料理の多数のレシピが日本語に訳され載っている。

²⁹ 『横浜の女性宣教師たち』137 - 139頁

本家屋の故、宣教師たちにとっては冬期の寒さもこたえたらしい。³⁰ 弘前学院の年表には1904年に宣教師館着工の記事があり、1905年落成、1906年に登記したとされている。設計、施工は弘前教会の教会員であった桜庭駒五郎であったと伝えられてきたが、本当のところはわからない。桜庭がアメリカから送られてきた設計図を元に施工したのではないかという説が一番妥当である。³¹

建築費用に関しては、アメリカのミッション（メソジスト監督教会女性伝道協会のことと思われる）に要望し、建築費の大半を負担してもらった。この建築資金提供の約束を取りつけるために尽力したが、メリー・グリフィス（1861 - 1923）なる女性宣教師である。『弘前教会百年史年表』によれば、1901年より1909年までその名前が載っており、この時期に弘前に住み弘前教会を中心に宣教師として活動した人物と思われる。³² グリフィスは桜庭駒五郎と親交があり、桜庭は宣教師館建築工事に関しては損得抜きで行ったとされる。弘前教会を中心にして宣教活動を行ったグリフィスと、弘前教会の教会員であり役員でもある幹事を務めていた桜庭との間には信仰の友としての関係が築かれたのであろう。彼女の手紙（宣教師レポート）からも桜庭に対する信頼が読み取れる。³³ そして、新しく建てられた宣教師館にも居住したのであろう。

また、グリフィスはキリスト教主義女学校の校長としての役目より、下北半島にはじめてキリスト教を伝えるなどの活動に精力的に取り組んだ。彼女が弘前女学校の校長としての在任した期間は1904年から1905年の1年余りと短い期間であるが、弘前を離れたのは1914年である。³⁴ 余談ながら、1908年にグリフィスは弘前市桶屋町に「慈愛幼稚園（Charity Kindergarten）」を創設する。このことから、前述したボークスの「あだこ学校」にも通じる児童福祉の事業にも力を注いだことがわかる。キリスト教精神に基づいた子どもたちの育成・教育を弘前の地に根づかせようとした思いをくみ取ることができる。³⁵

宣教師館は、その後も歴代の女性宣教師たちの住居として用いられた。1941年戦時色が濃くなる中、女性宣教師エルマ・テラーとロイス・カーティスの帰国を最後に宣教師たちが住む時代は終わった。再び宣教師がやって来たのは第二次世界大戦後のことである。³⁶

その後の宣教師館である。1978年に国の重要文化財に指定され、同年から3年をかけ現在の弘前市稔町に移転。移築と修復がなされた。現在は明治時代の貴重な洋風建築物として保存され、一般公開されている。

おわりに

弘前学院の創立期と宣教師たちの関わりを概観してきた。気づかされることは、海を渡って来日し、日本の北の端とも言える弘前という町にキリスト教の種を蒔いていった女性宣教師たちのその信仰と勇

³⁰ 相澤 前掲書 216 頁

校長として赴任した宣教師たちの多くは、しばらく函館での生活しており、冬期も快適に過ごすことができるストーブ設備が整う洋館に慣れていたという。

³¹ 『弘前学院百年史』148 - 150 頁、及び 745 頁

桜庭駒五郎（1871 - 1955）。土木建築業者。円満商会主。

³² 『弘前教会百年史年表』19 - 22 頁

³³ 『弘前学院百年史』153 頁、及び『弘前学院 120 年史』95 頁

³⁴ 同書 155 - 158 頁、及び『弘前学院 120 年史』16 頁

グリフィスの生没年は『横浜の女性宣教師たち』による。来日女性の宣教師リスト xvii によれば日本在住期間は1889年 - 1923年とある。

³⁵ 『弘前学院 120 年史』57 頁

³⁶ 『弘前学院百年史』154 頁

気である。しかし、いずれの宣教師にも協力する日本人のキリスト者たちが現れ、その協力者たちと共にそれぞれの活動がなされていった。女性宣教師たちと日本人キリスト者の働きの故に、教会が建てられ、学校がつくられていった。さらに、子守りの子どもたちのための学校であったり、幼い子どものための幼稚園が開かれていった。宣教師たちの母国アメリカでは、宣教師の派遣のため、また学校創立のため、あるいは宣教師館の建設のために資金を支出すべく機関誌を購読する人々や献金を献げる人々がいた。

そのような多くの人たちの思いが結実して弘前学院がつくられた。また同時期に、日本各地にキリスト教主義学校が創立された。こと弘前においては、東奥義塾というキリスト教主義学校がすでにありながら、これと合併したり合同するのではなくキリスト教に基づく女子教育を行うべくつくられたのが弘前学院である。長い歴史の中で時代状況に合わせ女子校から共学とはなったが、やがて創立 140 周年を迎えようとしている。³⁷

筆者は、2023 年 3 月より弘前学院大学で宗教主任（教務教師）として勤務している。それ以前は 1998 年より 22 年間弘前学院聖愛高等学校で同職にあった。弘前学院のキリスト教教育の職責を果たす立場で勤務していることとなる。今回本稿をまとめるにあたり、改めて弘前学院の創立期の歴史を学び、その時代に思いをはせる時間を持つことができた。決して日本の主要都市ではないこの弘前の地にキリスト教の種が蒔かれ、キリスト教に基づく教育が行われ、その価値観が持ちこまれ影響を与えてきた。そして、今もなお、キリスト教の精神を受け継ぎながら教育を行う者たちがいる。来弘した数多くの女性宣教師たちとその働きは、これからも忘れ去られることなく受け継がれていく弘前学院の貴重な財産なのだと考えている。

本稿作成のため日本基督教団弘前教会、及び弘前学院大学社会福祉学部松本郁代教授より書籍をお貸し頂いた。また、同文学部の諸先生方には温かい励ましとアドバイスを頂いた。心から感謝を申し上げる。

参考文献・引用文献表

書籍

- ・日本キリスト教歴史大辞典編集委員会『日本キリスト教歴史大辞典』教文館 1988年
- ・日本基督教団弘前教会『120年の歩み 日本基督教団弘前教会』日本基督教団弘前教会 1995年
- ・大木英二『弘前教会百年小史』日本基督教団弘前教会 1983年
- ・日本基督教団弘前教会『弘前教会百年史表』日本基督教団弘前教会 1975年
- ・弘前学院百年史編集委員会『弘前学院百年史』弘前学院 1990年
- ・弘前学院120年史編集委員会『弘前学院120年史』弘前学院 2006年
- ・O・ケーリ 江尻弘訳『日本プロテスタント宣教史 最初の50年』教文館 2010年
- ・北原かな子『津軽の近代と外国人教師』岩田書院 2013年
- ・氣賀健正『本多庸一 信仰と生涯』教文館 2012年
- ・岡部一興『長谷川誠三 津軽の先駆者の信仰と事績』教文館 2019年
- ・相澤文蔵『津軽を拓いた人々 津軽の近代化とキリスト教』弘前学院 2003年
- ・福島恒雄『北海道キリスト教史』日本基督教団出版局 1982年
- ・小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』東京大学出版会 1992年
- ・齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記 明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』新教出版社 2009年
- ・横浜プロテスタント史研究会『横浜の女性宣教師たち 開国から戦後復興への足跡』有隣堂 2018年

³⁷ 弘前学院大学は 1999 年共学化、弘前学院聖愛高等学校は 2000 年共学化された。

- ・ ボーカス『常磐 西洋料理(Tokiwa Cook Book)』教文館 1925年 (第五版)

論文

- ・ 齋藤元子「メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への来日宣教師夫人の貢献」
『ウエスレー・メソジスト研究 (10)』85-97頁 日本ウエスレー・メソジスト学会 2009年
- ・ 保村和良「アメリカ人女性が見た明治中期の弘前と原風景」
『東北女子大学・東北女子短期大学 紀要 No.56』128-137頁 東北女子大学 2017年